

◆2022年（令和4年）7月20日発行 ◆Vol.60

故きを温ねて、新しきを知る
〜帯広葵学園のあしあと60〜

「光る泥だんご物語」―伊豆新聞の記事から―

学校法人帯広葵学園

理事長 上野敏郎

令和3（2021）年9月6日の伊豆新聞の記事が手元にあります。そこには「光る泥団子できた！」と大見出しがあり、「姉妹都市 帯広の図書館に展示」「22日から松崎みどりの少年団、作品交流」と小見出しが続きます。文中に目を移せば、「学校法人帯広葵学園が22日〜10月5日、市内の園児が作った光る団子を市の図書館で展示する。」とあります。ここに出てくる「市内の園児」とは、帯広葵学園の園児のことを言います。

帯広葵学園では、令和元年から光る泥だんごづくりに取り組んでいます。そのきっかけは今から14年前に私が仕事で松崎町を訪問したことにあります。ただ、その時は珍しい取り組みだと受け止める程度だったのです。

それから数年経ったある日、テレビの画面に「光る泥だんごづくりにハマったアメリカ人」が目飛び込んできました。その内容は、戦場から戻った元兵士が、いわば自分自身の心の統一を願いながら光る泥だんごづくりに取り組むものでした。もちろん、その以外にも、光る泥だんごそのものが持つ芸術性もそのドキュメンタリーのテーマでした。

それを見て私は、改めて「光る泥だんご」に興味を持つことになりました。先ず、松崎町を訪問しました。分かったことは、松崎町では町内にある「長八美術館」でその指導をしていることです。帯広の子どもたちは、夏に姉妹都市交流の一環として松崎町を訪問していますが、その時は必ずその美術館で光る泥だんごづくりに取り組んでいました。

次に分かったことは常滑市にある「土・どろだんご館」でもこの光る泥だんごづくりの指導をしていることです。この館は、住宅資材などで有名な陶器を扱う会社が運営していました。帯広葵学園の光る泥だんごづくりの最初は、この館で使う「泥だんごのタネ」を使っています。今は、このタネをそれぞれの幼稚園で手づくりしています。

さて、言うまでもなく帯広葵学園の光る泥だんごづくりは、そう古いものではありません。しかし、着実に園児の保育活動の中に定着しつつあります。「だれでも作れる泥だんご、誰でも光らせることができる泥だんご、しかし、その光り方はさまざまな光る泥だんご」。そこから、あなたは何を学びますか。

令和3(2021)年9月6日(月)伊豆新聞

姉妹都市 帯広の図書館に展示

22日から松崎みどりの少年団、作品交流



松崎町みどりの少年団の小中学生8人は4日、同町の姉妹都市・北海道帯広市で開催される「光る泥だんご展」に向けて、民芸館で光る泥だんご作りに取り組んだ。漆喰（しっくい）を材料にした泥だんごに色を塗り、光沢が出るまできれいに磨いて完成させた。

同市の学校法人帯広葵学園が22日〜10月5日、市内の園児が作った光る泥だんごを市図書館で展示する。交流のある松崎町の子どもの作品も一緒に展示したいと依頼があり、少年団の作品も並ぶことになった。

子ども達は漆喰にアクリル絵の具を混ぜた色漆喰を泥だんごに塗ってドライヤーで乾かし、空き瓶のふちで丁寧に磨いた。次第に光沢が始め、「ピカピカだ」「すくすくきれい」などと喜んだ。

鈴木想史くん（松崎小5年）は「磨くのが難しかったけど楽しかった。本を読むのに見てほしい」と笑顔を見せた。

光る泥だんご
できた！